

# 短い文で綴るエピソー ド集

沙希斗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

日々の出来事、SS（ショートショート）、ハプニングなど思い付いた事を短い文で綴  
るエピソード集です。

実話が中心ですが、中にはそうじやないのもあります。

目

次

ラジコンヘリ祭

新型コロナワクチン接種レポート

52

変態途中の日常

苗床

たらこ唇

虚しき猛アピール

夜中に蠢くものは

うりずんの使者

虫の知らせ

託されたもの

託すものと託されるもの

七夕に寄せて

父とカラス

金持ちな虫

49

45

42

38

34

30

26

21

16

13

5

1

55

間抜けなヒキガエル

「もう良いよ」と鳴く蝉

金色の蛇

家を守るもの、井戸を守るもの

虚しき猛アピール、その後

「ピースサイン」の元は挑発だった?

79

髪の毛の不思議

82

75

71

67

64

60



# 変態途中の日常

それは、ウグイスが谷渡りの練習を始めた頃の季節だつた。

暖かな良い天気で、日が少し陰り始めたのでそろそろ洗濯物を取り入れようと洗濯ばさみを外していく、鋭い痛みが左手の掌に走つたのだ。

私はしまつた、と思つた。

恐らくムカデが潜んでいて咬まれたのだろうと。

しかし掌を見るとそこにいたのは一ｃｍか、それより少しあるぐらいの小さな黒い蜂だつた。

普通の蜂なら黄色系の体色に黒の縞だがこの蜂は黒に白の縞がある。

この特徴はクロスズメバチに違いない。

だが「彼女ら」は、獰猛で有名な「スズメバチ」とは名ばかりの非常に大人しい蜂である。

向こうから襲つて来るという事は巣にうつかり触つてしまつた、という事でもなけれ

ば有り得ない。

なので今回も、たまたま洗濯ばさみにとまつていたものを掴んでしまったがために刺されたのだと分かつた。

すぐに飛んで行つた「彼女」に心で詫びつつ刺されたヶ所に目をやると、印のようにぽつりと赤い点が付いており、その周りが少しだけ腫れていた。

見た目はそれだけなのだがとにかくずきずきと痛い。

なので取り敢えず、痛みが引くまで水に付けて置いた。

それ以上腫れもしなかつたので大した事は無かるうとその後は何も処置をせずに放つて置いた一週間後、何故か左足の指の間が無性に痒くなつた。

見ると皮が剥けている。

それどころか日が経つにつれて痒みが足の裏にまで広がり、そこの皮も剥けるようになってきた。

一応皮膚科に行つてみると、医者は指の間の皮膚表面をメスで軽くこそぎ取り、顕微鏡を覗いてこう言つた。

「白癬菌ですね」

つまり水虫である。

興味があつた私は無理を言つて覗かせてもらつたが、確かに透明な糸くずのようなものが見えた。

ところが、処方された薬を塗つても一向に治る気配が無い。

それどころかますます皮膚が剥けているような気がする。

それも表面だけでなく、もつと深い所までいつているのではないかと思うような剥け方をしている。

剥けた箇所をよくよく観察してみると、黒くなつていた。

恐る恐る触つてみると、皮膚にしては全く弾力が無く、硬かつた。

私はまるで甲殻のようだなと思つた。

甲殻みたいで黒い――!?

そこで愕然としつつ、私は「彼女」に刺されて以来跡になつてゐる、小さな印のような点を見た。

あれから、私は変わらない日常生活を続けられてはいる。

だが、足の裏は相変わらず無性に痒く、皮が剥け続けている。

もう一度皮膚科に行くべきだろうか？

それとも皮膚科を変えるべきだろうか？

悶々としつつ、実は変態しているのではないかという不安が募る日々である。

# 苗床

仲良しの三人が日取りを合わせ、花見に出かける事にした。

そこは山桜が沢山生えているという有名な山地で、平地に植えられたソメイヨシノとの共演も相まって、それはそれは見応えのある桜並木が山の方まで続いていた。

「綺麗だねえ！」

「うん。来て良かったな！」

「うんうん、ジジイを死んだ事にして忌引き休暇を取つて良かった」

そう言つた一人に「お前勝手に爺さん殺すなよお！」と残りで突つ込みつつ、山道を登る。

少々険しいが観光用に整備されており、三人は時折花びらが掛かるのをはしゃぎながら、登りやすそうにスイスイと上がつて行つている。

が、やはり長距離を登ると疲れた様子で、途中の広場になつてゐる所で一人が「少し休まないかあ？」と情けない声を出した。

「もう少しで頂上だから頑張ろうぜえ」  
もう一人がそう言つたが、彼もかなり疲れた表情をしていたため、ゆっくり休む事にした。

「ついでだからおやつ食おうぜ」

「どうせなら昼御飯にしようよ。俺お腹空いたあ」

「そうだな。時間的にも丁度良いから休憩がてら食つちまおうぜ。あそこに休む所もあるしな」

三人目が指差した場所に、屋根付きの見晴台があるのを見た二人は今にもしゃがみ込みそうな様子はどこへやら、競走するかのように嬉しそうに走つて行つた。

「いっちはーん！」

「あ、オレの方が速かつたつて！」

そんな二人に「餓鬼かおめえらは」と苦笑しつつ、残つた三人目がゆっくり近付く。

そこはまだ途中ながら、今まで登つて來た距離分の景色が見渡され、もうそれだけで疲れが吹つ飛ぶように思えた。

「すっげええ!!」

「うつわあ、綺麗だねえ！」

「やつぱ通称『桜山』とか言われてるだけあるな。見渡す限りほぼ桜じやん」

感動しつつ、弁当を広げる。

コンビニで買ったただの嫁さんの手料理が羨ましいだと喋りつつ、美味そうに三人は食べた。

景色を堪能しながらもう少し休み、落ち着いたから再開しようと話していた時である。

ふいに風が吹き、盛大に花吹雪が舞つて彼らを包み込んだのだ。

三人は思わず目を瞑つた。

そして風が止んで目を開けた時、一人がいなくなっていた。

「おい、あいつ何処行つた!？」

愕然としつつ見回し、それでもいのを見て慌てて探す。

もしや高台になつている見晴台から落ちたのでは!? と下を覗き込んだが、遠くまで見渡せるように高い木が切られているこの場所からは、目の届く範囲にはいないうだつた。

「先に、行つたりはしてないよな?」

「まさか! もしそうだとしても、黙つて行くような奴じやねえだろ」

「……そうだよなあ」

何度も名前を叫んだが、角度によつてか山彦が応えるぐらいで返事がない。

来た道を引き返したり、時折登つて来る観光客に聞いたりしてみたものの、それらしい人物を見たという情報は無かつた。

そうこうしている内に日が陰り始めた。

「下山しよう」

「そんな！ どこかに落ちて怪我してたらどうすんだよ！」

「……山は暗くなるのが早い。そうなると俺らも遭難し兼ねない。食糧ももう無いし、軽装で來たから冷えたら動けなくなつちまう。ここは一旦下りて、プロに任せよう」「…………」

一人はそれでも言い寄つていたが、最後は説得されて、渋々二人で下山した。

それから捜索隊も出て捜してもらつたが、彼は一向に見付からなかつた。

打ち切られ、それでも諦められずに捜していた二人は、再び彼がいなくなつた見晴台に来ていた。

桜の花はとうに無かつたが、緑が遠くまで見渡せ、相変わらず景色は素晴らしい。  
しかし二人の目には、鮮やかな緑も沈んで見えていた。

「何処に行つちまつたんだよお…………！」

一人が半ば泣くように呼び掛けたその時、あの時のように再び風が吹いた。

今度は花吹雪ではなく葉が舞い散り、二人はまた目を瞑つた。目を開けると、何故か景色が一変していた。

木々が生い茂つてはいるものの、ぽつかりと開けた場所がある。

二人は顔を見合わせつつも、そこに進んだ。

遠目でも分かつていたのだが、そこには一つだけ大きな木の根があつた。

それは切り倒された切り株、というものではなく、木の根が絡まり合つて根っこだけ残つている、というような感じだつた。

その上に本来あるはずの、木の幹や葉っぱなどは無い。

代わりのように「あつた」ものは、裸で、胸から上あたりを露出している人間だつた。

乳房が無い事を考へると恐らく男だろう。

それが頭を垂れたまま、木の根に取り込まれるようにして「生えていた」。

驚愕した二人は声も出ず、見てはいけないものを見た面持ちでただ「それ」を凝視していた。

そうする事で初めて、心臓の位置あたりに芽のようなものが出ている、という事が分かつた。

と、「それ」がびくりと動き、悶えながら頭を上げた。

そうする事で顔が見えた。苦し気に歪んでいる。

無精髪になつてゐるその顔は、いなくなつた彼のものだつた。愕然となりながら彼の名を呼び、近付こうとする二人。声が聞こえたのか苦痛に呻きつつも、男はこう言つた。

「……げろ……！」

「なんだつて?!」

「逃げろ……、たの……つ！」

「何言つてんだよ！ 今すぐ助けてやる!!」

『無駄じやよ』

その時冷たい、刃のやいばような声が聞こえた。

二人がその方を見ると、雅な着物を着た者がいた。

見た目で言えば十歳になるかならないか、という程度だろうか。

顔付きから多分少女だろうと思われるのだが、あまりにもあどけなく、幼女と言つても差支えない程の年齢にも見える。

が、白、かと思つたがほんのり赤みがかつたおかっぱの髪、色白の幼い顔立ちには似合わない異常な程赤い唇、目の縁に赤い化粧を施した、黒目がちだが妖艶さが漂う瞳などを見ると、とても普通の人間とは思えない雰囲気があつた。

『大人の男二人がかりでもその根からは抜けやせん。じゃがせつかく“我が子”を宿せ

たのじや。万が一でも連れて行かれては困る』

「……。『我が子』だと!』

「そ、それは……、それは、どういう……?」

『氣圧され、少々怯えつつ、二人は聞いた。

『ほれ胸のあたりに芽が生えておるじやろう』

「これが、『我が子』と言いたいのか?」

『そうじやよ。今彼の者の心臓に宿つた種がの、ようやく成長を始めたところなのじや』

『彼女が言い終わるとそのタイミングを見計らつたかのように、芽が少し伸びた。

それに伴つて苦痛があるのか、「宿主」と化した彼が呻き、身もだえる。びくりびくりと痙攣するかのようなその様子を見るに見かね、一人が「こんなもの抜いてやる!」と芽に手を掛けた。

『それは困るが、抜いてもその者は助からんぞ? 抜くや否や芽が通つた場所と心臓内に蔓延つた根とで大きく抉れてしまうじやろうの』

「……、そんな……!」

「クソが……つ!」

『そうなれば大出血してしまう。恐らく即死するだろう。

『それよりもな』と、彼女は嬉しそうに切り出した。

『そなたらを呼んだのはそういう事をさせるためではない。ようやく芽が出た“我が子”的お披露目をしたかったのじや』

「お披露目？」

『そなたらの言葉で言う“誕生会”というものじやな。共に祝つてたもれ』

彼女は嬉しくてたまないとでも言いたげに、徳利と杯の乗つた盆を持って来た。  
予め用意したのか人数分あるそれに注ぎ、『ささ、一杯』などと言いながら差し出して来る。

「ふざけるな！」

だが激昂した一人が飲むどころか引っ手繩り、彼女にぶちまけた。

『つれないの、祝うた後そなたらも同じ目にあうというのに……』

妖しく微笑んだ様に引き攣つた顔をした一人だつたが、既に遅し。逃げる素振りをする間も無く、彼と同じように根に絡まれた。

もがけばもがく程に絡み付くそれが下半身を取り込み、腕もそうなつて服が引き裂かれ、胸から上だけが露出される。

『ほら、あなたのゆりかごですよ……』

なおももがいていた二人は、そう言いながら近付いて来た彼女の手に、サクランボの種のようなものがあるのを見た。

# たらこ唇

自慢にもならないが、私はド田舎に住んでいる。

周りは田んぼと山しか無い。

ポツンとではないが隣は軽く百メートルぐらいは離れているため、夜家の明かりを全部消そるものなら、外はそれこそ鼻をつままれても分からぬぐらいの真の闇が広がる。

おかげで晴れた夜の星が物凄く綺麗だ。

星座どころか銀河がハツキリ見えるくらい。

しし座流星群などの時期には広い場所で寝ころんでいるだけで四方八方から飛来する流れ星が観察できるし、満月の夜にはとても神秘的な月が近くに見え、月光浴を楽しむ事が出来る。

が、田舎に付き物というのか、当たり前というのか、とにかく虫やら猪やらの害虫、害獸が多い。

家庭菜園を洒落込もうとすれば、葉物はアオムシやらヨトウムシやらの蝶や蛾の幼虫で、たちまち網の目どころか芯だけ残したようになつてしまう。その分アゲハも含む大小様々な蝶が来るのは、綺麗なので割と見るのは好きなのだが。

虫の被害は多少大目に見れても猿や鹿は根こそぎ持つて行つたり食べられたりしてしまうため、それらの被害防止に網やら囲いやらをしなければならない。

さて、そんな場所だから家の中に虫が入つて来る事は当たり前で、なのでいちいち虫嫌いが悲鳴を上げる、という心境にもならず、というか私は別に虫嫌いでもないので毒虫以外はつまんで逃がしたり毒虫だつたら殺虫剤で殺すのだが、それでも流石に参つた出来事があつた。

ある晩、夜中に何故か唇が物凄く痛くなつて目が覚めた。

寝惚けていたので何が起つてそうなつたのかサッパリ分からない。が、とにかく痛くて、しばらく寝られなくなつた。

それでもいつの間にか寝ていたようで朝起きた時、鏡を見てギョツとした。上唇だけが倍ぐらいに腫れ上がつていたからである。

私は何となく見当が付いた。恐らくムカデが布団に忍び込んで咬んだのだ。

まさかムカデに直接キスされるとは思いも寄らなかつた。

相手が雌だつたかどうかは姿が見えなかつたので確かめようがないが、そんな事はどうでも良い。虫にモテるとか嬉しくもない。

ちなみにムカデの毒を中和させるには火傷をしない程度の熱いお湯につけるのが一番で、咬まれてからつけるまでの時間が短い程、腫れないし後遺症も少なくて済む。しかしそういう知識はあっても唇を直接熱いお湯につけたら耐えられないに決まつてる。

幸いにというのか夜中に襲つた眠れない程の痛みはすっかり引いており、見た目が酷いだけで他は大した事にはならなさそうだったので、自然治癒に任せることにした。

腫れが引くまで会う人ごとに笑われたが、運良く親戚や親しい者としか会わなかつたため、お互に爆笑するだけで済んだ。

それどころか自分で面白がつて写真を撮り、他県に住む友達にも送つて笑い合つた。

# 虚しき猛アピール

私の家は県道から少し山側に入つた突き当たりにあり、それ以上奥には家は無い。そんな道路から離れた場所であるにもかかわらず、何故か野良猫がやつて来る事がある。

しかも居心地が良いのかそのまま居つく奴もいて、そうやつて猫が飼われていく。

つまりペットショップで買つたりどこかで拾つたり、誰かから貰つたりして「猫」というものを飼つた事が無い。

うちちは私が子供の頃からずつとこんな感じだつた。

なんせ私が「猫を飼い始めた」記憶として覚えているのは、小学生だったかそれより前だつたかにうちに来た三毛猫を、父が「お前はミイつて言うんよね♪」などと言ひながら勝手に家に上げ、そのままうちの猫になつたという所からなのだ。

三毛猫なので当然雌で、その当時は避妊や去勢などという義務は無かつたために、（余所から雄猫が来て）何匹も子供が出来た。

なので飼うつもりがないものは目の開かない内に、情が移らない内にと父や祖父が山の奥へ捨てに行つたものだつた。

そのミイの代が四代程続いた後死んだりいなくなつたりして途絶え、また他の野良が居つくという事を繰り返して、今現在は避妊させた雌猫が一匹いる状態である。

その間に、一番多い時では五匹の猫を飼つていた。

もう昔のように性に關しては野放しにはせず、雌ならば避妊させ、雄ならば去勢させてそれそれがいなくなるか死ぬかするまで飼つて、今に至る。

さて、特に雌猫を飼つていると毎年この時期に起きる事なのだが、雄猫がやつて来る。猫の繁殖期は春先と夏頃らしいのだが、何故か春にしかやつて来ない。

というか繁殖期になるとお互いに鳴く、「恋の歌」が目立つのがうちでは春だけなのだ。

避妊していない雌でも言える事なのだが、猫の「恋の歌」は非常に大きく、やかましい。

しかも夜中も関係無く鳴き続けたりする。

当然近所迷惑だが、生憎うちは近所といつても百メートルは余裕で離れているので見え寝不足になつたとしても被害にあうのはうちの家族ぐらいだし、うちは昔から「猫が

いるなら当たり前」というスタンスなので、むしろ「今年はこんな雄が来た」などと逆に楽しんだりしている。

うちの雌は避妊手術をして子宮が無いので発情しないはずなのに、それでも雄が来るのだ。

今年来た雄は小振りな雉猫だつた。

大人になりきっていないのか、それとも栄養が足りずに小さく育つたままなのかは分からぬが、顔付きもどことなく幼いような気がしないでもない。

何故なら大人の日本猫の雄はえらが張り、真正面から見ると顔が四角く見えるのが、「彼」にはそういう特徴が無いからである。

最初に来たのがコイツで、次に来たのはアメリカンショートヘアみたいなシルバーと黒の縞。こちらは普通の雄のサイズなので、雉より少し大きい。

アメリカンショートヘアのようにずんぐりしていないうし縞も雉のように細かい所を見るに、恐らく雑種なんだろう。

いずれも尾が長いため、雉を見慣れた頃に来たシルバータビー（通称白縞）を見て一瞬区別が付かず、母などは私が指摘し、なおかつ二匹が揃うまで雉（通称縞もしくは黒縞）だと思い込んでいたほどだつた。

この二匹、鉢合わせをすると喧嘩をするのだが、お互に弁えているのかずれて来る

ようで、今の所一度しか鉢合わせを見ていない。

縞の方は必ず「恋の歌」を歌いながら来るので自己主張が激しいが、白縞はいつも黙つて来るので気が付いたら来ている、という感じ。

どちらも来るとうちの雌のためにいつも入れつ放しになつて、ドライフードを食べて帰る。

繁殖期に限らずいつも忘れた頃にふらりとやつて来ては餌だけ食べ、居つきはしないがしばらく家中で寛いでから帰つて行く黒猫（こいつも多分雄。一番デカイ）もいて、なので今うちは餌の減りが激しい。

今の所、縞（雉）の出入りが一番多く、毎日のように「恋の歌」を歌いながらやつて来るのでやかましくて仕方が無い。

しかもうちの雌がいると、猛アピールして来る。

誰かがいると逃げ腰で餌を食べて即帰つて行く癖に、「彼女」がいるのを見付けるや「恋の歌」もヒートアップし、すぐ傍まで近付こうとするのだ。

が、前記しているがうちの雌は避妊しているので、発情しない。

発情しない雌は当然交尾をする気が無い。  
なので迷惑そうな顔で睨んだり、「しつこい！」とばかりに猫パンチを繰り出したり、自分から逃げたりする。

だがそんな事ではめげないようで、毎日のようにそういう光景が繰り広げられる。向こうは必死なんだろうが、もし万が一間違いにでも交尾を成功させられたとしても妊娠しないため、無駄な努力である。

ああ、今日もまた「彼」の「恋の歌」が聞こえて来た。

この虚しいだけの猛アピールは、恐らく「彼」の気が済むまで続くに違いない。

# 夜中に蠢くものは

いつからだろう。

夜中にふと気が付くと、カサカサという微かな音が家の中から聞こえて来るようになつたのは。

最初はネズミだろうと思つた。

だがここは高層マンションの十二階である。そんな所にネズミなどいるだろうか？一応オーナーに連絡し、ネズミ捕り業者やその他漏電、スズメバチや鳥の巣関連なども色々調べてもらつたが、家の中にもベランダなど周囲にもそれらしき痕跡は無いとの事。

風のせいなのか？

だが風が強くない時にでもその音は聞こえるような気がする。

ならば気のせいだろうという事にして、そのまま何食わぬ顔で過ごすしかないのだろうか。

気にしないようにして生活していたがやはり気になるので、取り敢えず音の出所を探ろうと試みる。

よく耳を澄ませてもそれらしき場所に近付くと音が止んで失敗する、という事を何日か繰り返し、どうやら台所付近が怪しいのではないか？ という結論に達した。

という事はゴキブリか！？

有り得なくはない。が、ゴキブリって微かとはいえる程音を出すものだろうか？

あいつらは音で気付くというよりは、壁や床を走っているのを見付けて初めているのが分かるというものではないのか？

しかも夜中限定とかではなく、朝とか昼間でも走り回っているものではないのか？ まあ良い。

ゴキブリならば対処が分かる。

という事である日の夜中、例の音が聞こえたために、殺虫スプレーとたまたま無くなつて捨てようと思ったがゴキブリを叩けるのではと取つて置き、いつでも使えるよう身近に置くようっていたラップの芯を持つて、台所に忍び寄つた。

まだ音がしているのを確認し、いきなり電気を点けてみる。

案の定というのか、音が止んでしまった。

やつぱりか……。

想定していたががくりと肩を落とす。  
それでも、忍び足で台所内を点検してみる。

物が散乱しているとか、戸棚や冷蔵庫が開いているとか、食料品や調味料などが移動していたり中が零れていたり穴が開いていたり食べられた跡があるとかいうような、変わった事は特に無さそうである。

今までもそだつたが、今時点でもやはり変わっていない、と思う。たぶん。

なんか自信無くなつて来たな、と少し不安になつて、流し場あたりを見てみる。

こつちも洗剤が散乱しているとか、中身が零れているとか、かけてある調理器具などが落ちたり鍋の類いが移動していたりとかいうような変化は無い。

うーん、やはり気のせいなのだろうか……。

そう思つて踵を返そうとしたまさにその時、カサツという音がした。

気のせいじや無いのか!?

若干ビビリつつも、音がしたと思われる方へ向く。

恐らく三角コーナーあたりから聞こえたはず。そう思つて流しの隅に置いているそれには恐る恐る近付く。

そこにあるのはスポンジと、金かなだわしと、たわし。

生ごみ入れとして使つてないからそれらの物を放り込んでいるのだが、でもそれらに  
も変化が——!?

今、僅かにたわしが動かなかつたか?

思わず動きを止め、息も忘れた目の前で、たわしは確かに「身動きした」。

そうして、痺れを切らしたかのように、三角コーナーから這い出て来た。

え、えええ!?

声を出してはいけない気がして叫ぶのをどうにか抑え込む。

それは少しずつ、流しの中を移動し始めた。 移動する度に、微かにカサカサという  
音がする。

あの音の正体は、「これ」だったのだ。

流しの中を這う様を、固まつたまま目で追う。

しかし何をするでもなく、ただカサカサと満遍なく移動しているだけである。  
そうして行つたり来たり、ぐるりと回つたりを繰り返し、しばらくすると満足したか  
のように元の三角コーナーに帰つて行つた。

帰るともう、二度と動かなくなつた。

それが当たり前なのだが、何とも気味の悪い光景だつた。

もう動かないのを長い間確認し、再び忍び足で移動して電気を消して部屋まで戻る。

今のは何だつたのだろう。

動悸が止まらない。嫌な汗で背中がべつとり濡れている。  
こんな事が、時々夜中に繰り返されていたのか……。

まんじりともせずに夜を明かし、実は夢だつたのではないかとおつかなびつくり三角  
コーナーを覗いてみる。

いつもと変わらず同じ場所にたわしは鎮座している。  
だが、なんとなく流しの中が若干綺麗になつてている気がした。

## うりづんの使者

今年は梅雨入りが異常に早かつたので少し遅いのだが、春分から梅雨入りまでの頃の季節の事を、沖縄では「うりづん」というらしい。

なぜこの言葉を知っているかというと、私は沖縄（八重山諸島）に住んでいた事があつたからである。

このうりづん、漢字で「若夏」と書く事もあり、文字通り本格的な夏になる前の季節の頃を指すようだ。

この季節が巡つて来る頃に聞こえてくるのは、こんな声。

→キヨロロロロ ←

鳴き始めが高くて尻下がりなこの特徴的な鳴き声は、「アカシヨウビン」という鳥。野鳥觀察では比較的見やすい「カワセミ」という鳥の仲間で、クチバシから尾の先まで全身真っ赤（腰だけ水色）な鳥である。

あまりに赤いために「山火事に遭つたカワセミが全身火傷をした姿であり、消え入る

ようには「鳴くのは喉が渴いて水欲しさに助けを求めていたのだ」という伝説もあるのだが。

また、梅雨頃の雨が降りそうな時期に鳴く（繁殖期になる）ので、「雨乞い鳥」「水乞い鳥」などとも呼ばれているらしい。

ちなみに沖縄では「リュウキユアカシヨウビン」という亜種になる。この違いは色。

アカシヨウビンは赤が目立つだけだが、リュウキユアカシヨウビンは紫の色彩が入るため、日の当たる角度によつては赤、赤紫、紫と色が変わつてアカシヨウビンより派手である。

（腰の水色も鮮やかに目立つ）

あと鳴き方も少し違うようで、アカシヨウビンが『キヨロロロロ～』と長めで語尾をのばすのに対し、リュウキユアカシヨウビンは『キヨロロロ』と少し短く、のばさないという違いがあるようだ。

この鳥が鳴き始めるとうりずんが来るという事で、沖縄ではリュウキユアカシヨウビンの事を「うりずんの使者」と呼ぶのだとか。

私が住んでいた頃もよく鳴き交わしているのを聞いていたものだが、本土（沖縄では内地と呼ぶ）では山岳地帯に多いらしく、こんなに目立つ色なのに滅多に見れないから

「見付けたら幸せになれる」などと言われた事があるくらいなので、鳴き声も聞く事自分が珍しいかもしれない。

だが一度聞くと忘れられない程に特徴的な声である。

私の今住んでいる所はいわゆる「里山」で、それ程高い山は無いはずなのだが、風の向きによるのか時折微かに聞こえて来る事がある。

しかし姿は子供の頃に一度だけ、わざわざ野鳥観察のために高山近くの山岳博物館に行き、そこで合宿しながら自然観察会を体験した時に見たきりだ。

その時はやはり近くにいたからか、特徴的な鳴き声も頻繁に響き渡つていた。

「カワセミ」に代表されるこの鳥の仲間は、日本では後一種類。パンク頭が特徴（色は白黒まだらで地味）の「ヤマセミ」しかいないが、「アカシヨウビン」だけ渡り鳥であるそうな。

ヤマセミも山岳地帯で見られる事が多い鳥なので子供の時に自然観察会で見たきり。だがこの鳥は姿に特徴があるので一度見たら忘れられない。

カワセミは山奥に行かなくても見た事がある。

まあ滅多に見れないが、農業用の溜め池で魚を狙つてるのを見掛ける事があるからである。

カワセミの場合は姿というより色に特徴があるので、これも一度見たら忘れられな

い。とにかく見惚れる程美しい鳥である。

余談だが、カワセミの漢字は翡翠。

つまり宝石の「翡翠（ひすい）」と同じ。

カワセミの美しく煌く青もしくは緑がかつた色が、宝石の色に似ている事からあの石をヒスイと呼ぶようになつたらしい。

# 虫の知らせ

突然だが、「虫の知らせ」という言葉を知っているだろうか。

なんとなく良くない事が起きる予感がする、というような意味なのだが、この虫の知らせを私は文字通りの意味で体験した事があった。

それは五年前の事だつたろうか。

しかしその話をする前に、その当時の年から二十年前に遡らなければならない。

生後半年の頃にうちにやつて来て飼われ始めた「ごんた」という雄猫がいた。

ちなみに「やつて来た」というのは文字通り「彼」の方からふらりとやつて來た（迷つて來た）という意味で、誰から貰うとか拾うなどしてやつて來た、という意味ではない。

それまでに飼っていた（というよりは野良が勝手に居ついて一緒に住むようになつた）猫は全て三毛、雑、黒ぶちなどの日本猫だったのだが、「彼」は珍しくペルシャの血が入つたような雑毛の長毛種で、なのでその時に初めて洋猫を飼う事となつた。

長毛種の猫は大人しい性格が多いらしいのだが、大人になつた「ごんた」は去勢しても環境がそうさせるのか今までの猫と同じように狩りが上手く、なので時折ネズミやら鳥やらを捕つて来ては見せびらかせつつ食べていた。

その頃、どうやつてここまで辿り着いたのか疑問に思える程の、生後三ヶ月経つただろうかと疑うくらい小さな子猫がやつて来ていた。

「彼」は子供には興味が無いのか、近付くと「寄るな！」と怒つていた。

だがその子が成長して狩りに興味を示し始めると、捕つたネズミをわざわざその子用の食器に入れてやる、という世話好きな面も見せていた。

五年前に戻る。

そんな「ごんた」が生後二十年で寝た切りになり、その（猫にとつては）長い生涯を終えようとしていた頃の出来事である。

今でもそうなのだが、毎年六月頃になると、何故か必ず昼食時に一匹だけやつて来る虫がいる。

それは見た目が「腰が括れていらない黒い蜂」といった風情で、なので私はずつと地蜂（地面に穴を空けて巣にする蜂の総称）だと思つていた。

蜂にしては腰が括れていらないのに違和感はあつたが、そんな蜂もいるのだろうと、長年調べもしなかつた。

しかしどうにも気になつてある日ふと調べてみたら、「アメリカミズアブ」だと分かつた。

つまり「蜂（ハチ）」ではなく「虻（アブ）」の仲間だつたらしい。  
どちらにしても刺された事は一度もないし、何をするでもなくただブンブンと忙しく飛び回るだけである。

何のために来るのが目的はサッパリ分からぬが、とにかく昼食時になると一匹だけ、必ずやつて来ては私が食べている間中、目の前を飛び回る。

それが目まぐるしいのと時々顔にとまつたりするのとで鬱陶しいのだが、それでも生き物が好きな私は邪険にせず、今でも来る度に「あ、いらっしゃい」と声掛けしては放つといっている。

さてその虫が、その日は私の傍らの、飯台の端にとまつたまま、じつとしていた。  
あれだけ忙しなく目の前を飛び回る虫が、その日に限つてじつととまつたまま、しばらく動かなかつた。

そしてまるで何かを訴えかけるかのように、触覚だけをゆつくりと動かしていた。

その時、何故か私は覺つてしまつた。

ああ、今日「ごんた」は死ぬんだなと。

するとその五時間後ぐらいに、「彼」はその生涯を閉じたのだ。

私と母が交代で見守っていたのだが、家族全員がたまたま用事が出来て見ていない時間帯だった。

それを済ませた私が見に行つた時には既に死んでいた。ので、誰も死に目に会えなかつた。

外出先から帰つて来、それを知つた母の嘆きたるや悲愴な事この上なかつたのだが、私は「前以つて虫が教えてくれていた」ので既に覚悟が出来ていた。

単なるこじ付けかもしれない。

でも、こういう事もあるんだなと思つた出来事だつた。

# 託されたもの

毎年大抵この時期（夏頃）になると、何故か必ず昼食時に一匹だけやつて来る虫がいる。

それは見た目が「腰の括れていらない黒い蜂」といった感じなので、私は長年地蜂（ジバチ）の類いだと思っていた。

地蜂というのは「ジガバチ」に代表されるような、地面に穴を掘つて巣にする蜂の総称の事である。

どう見ても蜂に見えるのに腰が括れていらない、という事にいつも違和感を持つてはいたのだが、そういう種類もいるのだろうと、気にはなりつつも長年調べる事まではしていなかつた。

が、ふと気になつて最近調べてみたら、どうも「アメリカミズアブ」らしいと分かつたのだ。

つまり「蜂（ハチ）」ではなく「虻（アブ）」の仲間だつたわけである。

名前の通りアメリカ出身の外来種で、日本には第二次世界大戦後に入つて来たとの事。

不衛生な環境で繁殖する（幼虫が増える）ため、水洗便所が普及していない時代には身边に見られ、蜂に似た姿から「便所蜂」などと呼ばれていたらしい。コンポストなどにも幼虫が湧くという事なので、うちにあるコンポストが発生源なんだろう。

確かに芋虫でもない蛆でもないような気持ちの悪い幼虫がコンポストにいるなど思つていた。

蛆虫が暗灰色の鎧を着たような姿をしているため、私はそれを「鎧蛆」と呼んでいた。恐らくハエではなくアブの仲間の子だろうとは思つていたのだが、そうか、その子たちの親だつたのか。

ちなみに衛生的な環境で養殖した幼虫は、良質なたんぱく源として乾燥させて、魚や鶏などの餌として重宝されているんだとか。

ミズアブの仲間は日本、つまり在来種もいるらしいのだが、幼虫が水田や温泉などの比較的暖かい水質を好むのと、アメリカミズアブの方が繁殖場所も繁殖率も断然上なうとあまり見掛けなくなつたらしい。

さて、虻の仲間と分かつても、蜂だと思い込んでいた今まで同様一度も刺された事が

無いのでちつとも脅威ではない。

何の目的で来るのかサッパリ分からぬが、とにかく食事中にただ目の前をブンブンと飛び回つて鬱陶しい。

だが生き物好きな私は邪険にする気にはならず、いつも来るので逆に友達のような感覚になつて、来るたびに「いらっしゃい」などと声掛けしては放つといっていた。

そんな中、ある日食事を終える頃、右手の甲側にとまつてじつとしていた事があつた。手乗りみたいだと思つて追わずにそのままにしていたのだが、あまりに動かないのと前話（「虫の知らせ」）の時のように何かを知らせようとしているのかと、少し不安になつた。

結論から言うと幸いその日に誰かが死ぬとかペツトが死ぬとかいうような不幸は無かつたのだが、相手が満足したかのよう飛び去つた後、ふと人差し指の腹を見た私はギョツとした。

そこに数ミリの、無数の白くて細長いものがくつ付いていたからである。

つまり、どうやら卵を産み付けていつたらしい。

とまつた時に指の間に尻を入れたままじつとしているなあとは思つていたのだが、まさか尻先を人差し指の裏（腹）に回してそんな事をやつていたとは！

まったく感覚が無かつたのもあって、驚きを通り越して固まつてしまつた。

これはまさか、託されたという事なんだろうか!?

だ、だがいくら私が邪険にしていないとか、殺さなかつたとかいつても、卵（命）を託す程、虫が信頼するとでも!?

そう焦った私であつたが、そのまま生活して幼虫を育てるわけにもいかないし、人差し指の腹はよく使うから卵を潰してしまうし、かといって他に移してまで育てようとも思わないし……、と色々考えた結果、「彼女」にはすまないと思いつつ、断腸の思いで洗い流してしまった。

手洗いはしているつもりなんだが、もしかして臭かつたのだろうか。

# 託すものと託されるもの

春先ではヘタクソだつたウグイスが「恋の歌（ホーホケキョ）」を上手く歌えるようになつた頃、それと競うようにこんな「恋の歌」が聞こえ始める。

キヨキヨ、キヨキヨキヨキヨ

これは「ホトトギス」の声。「聞きなし（生き物の声を人間の言葉に当てはめる事）」では「特許許可局」「天辺欠けたか」などが有名で、面白いものでは「天辺禿げたか」などというものもある。

（私には「特許許可局」と聞こえる）

別名は「子規（しき）」。つまり俳人正岡子規まさおかしきの俳号である。

彼は口の中が真つ赤なこの鳥が「血を吐くように鳴く」と言われている事から、結核で喀血する自分になぞらえてこの名前にしたらしい。

ちなみに本名は「升（のぼる）」なので、親しい者は「のぼさん」と呼んでいたそうな。さてこのホトトギス、ウグイスに托卵（たくらん）する事で有名である。

要するに自分の子供を勝手に他に押し付けて丸投げし、自分は育てもしないのだ。この習性は「カツコウ」の仲間に見られるもので、カツコウは「オオヨシキリ」に托卵する事が多いとの事。

他には「モズ」「ホオジロ」などが選ばれるようだ。

何故他に押し付けて自分が育てないかというのは謎なのだが、研究によると「彼ら」の体温は安定しておらず、環境によつて他の鳥より低い場合があるらしい。なのでそれでは確実に孵化させられないため他に託すようになつた、という説があるとの事。

だがこの説も確実性がないのだとか。

托卵先ではこんな悲惨な事が起きる。

ホトトギスならばウグイスそつくりな卵をウグイスの隙を狙つて産んだ「彼女」は、我が子を見もしないでサッサと何処かに飛び立つてしまう。

詳しく書くと目星をつけたウグイスが産卵した直後に相手が巣を離れた僅かな隙を見て巣に入り、数合わせのために相手の卵を一個くわえて自分の卵を一個産んで逃げるのだそうな。

(その間なんと約十秒。取つた卵は後で美味しく頂くとの事)

その卵はウグイスの雛が産まれるより先にまず孵り、なんと目も見えず羽毛も生えて

いないろいろくに足腰も立たない状態で、ウグイスの卵を自分の背に乗せて全部外に出してしまふ。

(そのために、ご丁寧にも乗せやすいように背中に窪みがあるらしい)

出された卵は木の上から地面に落ちるため、そのまま孵らずに死んでしまう。  
時には同じ頃に孵る事もあるらしいのだが、その雛も生きたまま背に乗せて外に出し、殺してしまう。

(その間、足元で自分の子を殺されようとしているというのに、当の親は知らん顔をしているらしい)

そうやつて巣を独り占めしたホトトギスの雛は、自分が餌を貰つてすぐすくと育つ。

それこそ仮親であるウグイスを呑み込む程に大きく。

(実際にはそんな事はしないが、それぐらい体格の差がある)

それはカツコウの雛も同じ事で、要するに自分よりも小さな鳥(食べるものは同じ)を仮親にするらしい。

そうやつて文字通り親より大きく育つた雛は、苦労して他の子を育てた仮親には見向きもしないでサツサと巣立つて行く。

その間、自分の子を育てられなかつた仮親は、その分個体数が減る事もあるらしい。

何故自分を呑み込む程大きく育つようになる雛を自分の子と思い込み、最後まで騙されたまま育て続けるのか？

それは雛の口の中が赤い事に原因があるらしい。

この赤（もしくは鮮やかなオレンジ色）が親鳥の給餌本能を搔き立てるようで、これに支配されると近くの巣にいる他の雛にをも餌を与えようとする程なんだとか。だが仮親も騙されつ放しという訳では無く、中には雛が孵る前に偽物の卵を見分けて捨てたり、それまでの模様とは違う模様の卵を産んだりするものもいるそうな。

そう言う関係から、「ホトトギス」は「ウグイス」が来る時期より遅れて来る（五月中旬頃）。

どうも托卵する相手が繁殖を始める時期に合わせているらしい。

なのでウグイスのいる地域ではホトトギスが漏れなくやって来る、という事になる。

# 七夕に寄せて

私はこの日、つまり七夕の夜中に産まれたのだという。

母が産みの苦しみを味わっている最中、そして産まれた時、父はその場にいなかつたのだそうな。

昔の事なので「立ち合い」というものは無く、出産中に夫が分娩室に入れてもらえる、などという事は（常識的にも）有り得なかつた。

なので一昔前のドラマにあるように呼ばれるまで近くの部屋かどこかで待機している、という感じだつたと思うのだが、父はいつもこんな時には間が悪く、妹が生まれた時（昼前ぐらいだつたらしい）も昼食に出掛けでその場にいなかつたそうな。

分かりやすい日に産んでくれたおかげで誕生日を忘れられた事が無い。

だが実際に七夕の行事をするのは旧暦（八月七日）だつたので、七月にササ飾を作るのは、保育所や小学校などで行ういわば遊びの類いだと思つていた。

七夕の「♪ササの葉さらさら」という歌は、その頃に教わつて皆で歌つっていたつけ。

作つたササ飾は行事が終わると川に流す風習があつた。

だが近くに川が無かつたのと、沢山流すと淀んだ所に滯つて掃除が厄介なので幼い頃に朧気に覚えている程にしか流していなかつた。

そういうやササ飾で「笪」と「竹」の違いを学んだような気がする。

新暦、つまり今現在使われている歴での七夕（七月七日）では、日本では梅雨の最中。沖縄辺りでは明けている事もあるかもしれないが、まだまだ雨が多い時期である。なのでこの伝説で天の川を渡り、年に一度だけ逢うとされる「織女」（しょくじよ）と「牽牛」（けんぎゅう）（日本で言う織姫と彦星）は天の川増水のために逢えない事が多い、という事になる。

お互いに仕事をサボつた罰とはいえ、可哀想な事である。

ちなみにこの日に二人のために天の川に橋を架ける「カササギ」が、天の川が増水すると架けられないでの、逢瀬を断たれた悲しみで泣く涙が雨となつて地上に降り注ぐのがこの日に雨が降る理由なのだとか。

天界の星として現される二人は「こと座のベガ」「わし座のアルタイル」という事になつてゐる。

天の川（銀河。英語で言うとミルキーウエイ）自体を見る事が難しい所もあるかもしれないが、見れるなら確かに二人は天の川を挟んで並んでいる。

二人（二つの星）は共に1等星なので、夏の夜空では目立つだろう。

近くに「白鳥座のデネブ」もあるが、こちらは天の川を泳ぐかのように中にがあるので見分けやすいかもしない。

天の川を見られなくてもこの三つの星は目立つため、三つを結んで三角になる事から「夏の大三角形」と呼ばれている。

天の川というのは宇宙に散らばる何億という星々が、何らかの力（中心にブラックホールがあるとされる）で渦巻き状になつた「銀河」と呼ばれる天体の一部らしい。全体で見ると渦巻き状に見えるものが、その中にいて横から見ているからただの「川」に見えるのだという。

我々の住む「地球」という星が「太陽」という馬鹿でかい星を中心として回つている事から、その見えている天の川つまり銀河の事を「太陽系銀河」などと呼んでいるが、その銀河の中の星の数が二千億個の規模で、その規模の塊つまり銀河の数が更に千億以上というのだから、もう想像すら出来ない程の広さが宇宙にはあるという事になる。

その距離たるや、この世で一番速いとされる「光」の早さで何億年もかかるのだそうな。

（だから星の距離は「光年」という単位が使われている）

それがたつた一度の大爆発（ビッグバン）で誕生し、今尚広がり続けているというのだから、どれだけ壮大な世界か考えると気が遠くなる。

# 父とカラス

父がトラクターを使い始めると、必ずカラスが付いて来る。

多分トラクターに驚いて出て来る虫や、耕す時に掘り返されて出て来る虫を目当てにしているものと思われる。

カラスには「ハシブトガラス」「ハシボソガラス」「ミヤマガラス」「ホシガラス」など何種かあるのだが、普段見掛けるいわゆる「カラス」と呼ばれているものはハシブトガラスとハシボソガラスぐらいである。

ちなみにこの「ハシ」というのはクチバシの事で、要はクチバシが太いか細いかでこの名が付いたようだ。

でも極端に太かつたり細かつたりしている訳では無いのでパツと見分からない。

両方を見比べてみて、初めて「そういうこつちの方が太いな（細いな）」と分かる程度である。

ハシブトの方がハシボソより少し大きい（ハシボソはスリムに見える）とか、ハシブ

トの声の方が澄んでいて「カアカア」とハツキリ聞こえるのに対し、ハシボソはややしやがれていて「ガアガア」と聞こえる、という特徴も、よく見たり聞いたりしないと分からぬ。

一番見分けが付きやすいのはハシブトの「おでこ（クチバシより上の部分）」が出ている（逆立つて）、という事だろうか。

ハシボソのおでこはスッキリしているので、「でこつぱちがハシブト」と覚えて置けば良いかも知れない。

あとハシブトは比較的都会に多い「都會のカラス」で、ハシボソは比較的田舎に多い「田舎のカラス」である。

さて今までの話でも何度も書いているが、うちほど田舎なので付いて来るのはハシボソガラスである。

そいつが一羽無いし二羽、二メートル程離れて後ろを付いて来る。

父もカラスもお互いに分かつていて、トラクターを運転する時期になると毎年まるで昔話に出て来る物語のような、ほのぼのした光景が見られるようになる。

あまり頻繁に見ると流石に逃げるようだが、父が「カーパ、来たか」などと声掛けしても逃げないらしい。

ハシボソは非常に頭が良く、車にわざとクルミを轢かせて中身を食べるという利用の

仕方をしたりするらしいのだが、うちの近くにはクルミは無いのでそういう光景は見られない。

その代わりというのかたまたま田んぼの害獣避けのついたてとして使っていた金属板に姿が映るヶ所があつたらしく、二羽が連れ立つてやつて来て、一羽が攻撃している姿を何日か見られた事があつた。

どうも自分の姿を敵と見なしたらしい。

それとももしかしたら攻撃の仕方を練習していたのかもしれない。

攻撃している一羽は地面に下りて執拗に金属板をつついていたが、もう一羽は何もせずにその上にとまつて見守つていた。

どうやら仲間に見張りを頼んでいたようである。

そのいつも来る二羽が、なんだか人間臭くて滑稽だつた。

そういえば、カラスの仲間には「オナガ」「カケス」「ルリカケス」「カササギ」がいる。  
(カササギは「カチガラス」とも言われているのでそのままカラスの仲間だと分かる)  
「カワガラス」などという鳥もいるが、こちらは「川にいるカラスに似たもの」という意味らしく、カラスとはまつたく関係の無い種類らしい(カワガラス科カラス属という事なので、特別な種類の鳥なようだ)。

ちなみにカササギには「カチカチと鳴いて縁起が良い」と、豊臣秀吉が朝鮮半島から

連れて来た（取り寄せた）という逸話があるのだが、どちらにしても日本にいるものは元々は人為的に持ち込まれたものだと考えられるという事である。

# 金持ちな虫

夏になると決まって、緑色の綺麗な甲虫が家の 中に入つて来る。

灯りに向かって突進したりその周りをぐるぐると飛び回つたりしてブンブンうるさいこの虫は、「コガネムシ（アオドウコガネ）」という虫である。

よく「カナブン」と間違えられる（私も間違えていた）のだが、コガネムシの体つきが丸っこいのに対し、カナブンはもう少し角ばつていて角を丸くした四角に見えるという違いがあるそうな。

顔付きも違つていて、コガネムシは丸くてカナブンは四角（へら状）になつている。「ハナムグリ」という花粉を食べる小さめで、緑に白い斑点のある上に上げた二種とよく似た甲虫もいるが、これは「カナブン」と同じ仲間なのだそうだ。

さてこのコガネムシに、歌（童謡）があるのはご存知だろうか。

「♪黄金虫は金持ちだ」というフレーズで始まるこの歌を、知っている人は少ないかもしない。

だが幼い頃に誰かから習つたと思われるこの歌を私は覚えていて、ブローチにしても良いような緑色の綺麗な虫が家中に入つて来る度にこの歌を頭に浮かべてしまう。しかし綺麗な見た目に反して害虫らしく、これが増えれば草花が被害に遭う。

親（成虫）は葉を食べるので網目状にされ、子（幼虫）は根を食べるので枯れてしまう。

要するにガーデニングをする人にとっては天敵とも言える存在である。

「アオドウコガネ」は楕円に磨いたアベンチュリンのように綺麗だが、黒い地味な「クロコガネ」というものもいる。

こいつも庭でよく見かけるコガネムシの仲間である。

（他には「ヒメコガネ」「マメコガネ」「ドウガネブイブイ」という面白い名前の奴もいる）前記したカナブンの仲間「ハナムグリ」は、名前と食生活の通り花にいる事が多く、小さ目の、緑に白い斑のある甲虫が花粉を狙つて花の真ん中にとまっている様は非常に可愛らしい。

（漢字で書くと「花潜り」という事なので、そのまま名付けられたらしい。受粉を助ける益虫として活躍している所もある）

花にいる関係でミツバチや蝶などと鉢合わせる事も多く、それらとの共演もまるでお互いに話しているみたいで見ていて微笑ましい。

ちなみにカナブンの方も、親も子も朽ちた葉を食べたり樹液を食べたりするので益虫なのだそう。

なので花の近くにはいざ、もっぱらカブトムシと一緒に木の汁を舐めている姿を見掛ける。

（成虫の頭がへら状なのも、朽ち木に潜るために進化したものと思われる）

しかしカナブンとコガネムシはよく似ているため、カナブンまでもが害虫扱いされて駆除される事が多いのと、カナブンの幼虫が「葛」<sup>ハグ</sup>という蔓植物を餌にしている関係で非常に数が少なくなっているらしい。

葛といえば「葛切り」という食べ物があるのだが、これはその葛の根のでんぶん（を精製した葛粉）を使って作る（水で溶かした粉を型にはめ、熱して固めたものをうどん状に切る）ものなのだそう。

だが本物の葛で作るのは手間暇がかかる（葛根を掘り出すのが物凄く大変）ので供給量が少ないのであり、今では偽物（主にジャガイモのでんぶん）で作られているとの事。

本物（葛粉）には身体を温め血行を良くする作用があるとして、風邪や胃腸の薬として民間療法で古くから利用されて来たそうな。

# ラジコンヘリ祭

うちの周りの田んぼでは、農薬散布にラジコン型のヘリコプターを使う事がある。免許がいるかどうかは分からぬが専用のラジコンヘリなようで、いつも農協かどこかで頼むらしい。

(詳しい事は知らない)

散布する日になると、普通のヘリコプターよりは小さいがよちよち歩きぐらいの幼児が一人乗れるのではと思える程の大きさのものを一機持つて来て、係の人が操作し始める。

田の上を一枚ずつ、満遍なく飛びながら行きつ戻りつして霧状の農薬を散布する様を見るのはなかなか面白い。

それを見ていたからなのか、それに関連するこんな夢を見た。

その日は散布日だつたらしく、近くの田んぼでラジコンヘリが飛んでいた。すると何故か大勢の人が集まつて來た。

なんでもラジコンヘリで農薬散布をする事が珍しいために、みんなで見に来たのだから。

その内出店が出たり、宣伝のためなのか大型液晶パネルで動画を映したりし始め、さながらお祭りのような騒ぎになつた。

私は父と二人で度肝を抜き、「なんじやこりやあ！」などと言いながら取り敢えず全体が見渡せるような高台へ移動して、その光景を眺めていた。

ラジコンヘリが農薬を散布し終わると、普通ならばそのまま帰るのに係の人気がそのまま待機している。

何でだろうと思つていて、再び飛ばし始めた。

どうやら空中アクロバットショーが始まつたらしい。

今度は田の上を満遍なく、舐めるように飛ぶのではなく、縦横無尽に時には宙返りしたりして自由に飛び回っている。

そんな事をしては農薬を田んぼ全体にかけられる訳がないので、当然農薬は出していない。

やんやの喝采の後、今度はコンサートが始まつた。

確かに私の住んでいる辺りは家の少ない山並み（正確には山に囲まれた盆地に近いが）の地域である。

近所迷惑といつても知れているので好き放題に出来なくはない。

しかし私達家族にはまつたく知らされてなかつたので、寝耳に水状態であつた。  
しかしせつかくのお祭り状態なので、私は人混みの中に入つて楽しむ事にした。

音楽には興味が無く、普段も聞かない私なのでコンサートはほぼ無視していたが、大型液晶に映されている様々な動画が面白く、それをずっと見入つていた。  
動画の内容はよく覚えていないが、色々なラジコンヘリの紹介やその機能について  
だつたように思う。

他には出店で何かを食べたり、食べながら歩き回つたり、射的やヨーヨー釣りなどを  
楽しんだ。

ひとしきり大騒ぎが続いた後でお開きになつた。

とても楽しくはあつたのだが、毎回こんな事をされてはちょっと困るなと思った。

# 新型コロナワクチン接種レポート

六月の終り頃、六十五歳以下に対する接種予約の案内状が届く。

基礎疾患のある者がまず先行対象となり、次に無い者を順次受け付けるとの事。が、案内が届いた直後に予約の電話を入れられると思つていたため、読んでいなかつたら勘違いをする所だった。

こんな人は多いだらうなと思いつつ、予約開始の日にならまで待つ。

ド田舎なので電話が繋がらないという事はまずないだらうと思われたし、先に二回とも済ませた両親もすんなり電話で予約出来たのだが、どうせならネット予約に挑戦してみようと思い立ち、ネットならではの特権として夜中に予約する。

必要事項を打ち込むと示された日にちと時間帯以外に選べないようにはなつていたが、都合が悪い人は変えられるようにリンクが貼つてあつた。

だがその日に予定はなかつたため、そのままその日にちと時間を選ぶ。

ネット予約の人は十分前ぐらいに来いとの事だつたため、それに合わせて行く。

希望した病院の入り口に当たり前のように消毒液が置いてあるが、私はアルコールアレルギーなのでスルー。

無理して消毒しようとすると手が爛れてしまうのでこればかりは仕方が無い。入ると体温測定器があり、液晶モニターに顔を映すだけで計れるようになっている。「正常です」というアナウンスが出たので安心しつつ予め案内状の封筒に入つており、前もつて必要事項を記入していた用紙に書き足す。

が、記入するための台に鉛筆しか置いて無かつた。

受付に持つて行くと案の定「体温の所だけ鉛筆ですね」と言われてボールペンで書き直される。

言い訳しつつ案内の言葉通りに廊下を渡り、接種場所へ。

そこには何人かが間隔を空けて座つていた。

時間が重なつたというよりは、接種を終えた人が待機時間を過ごしているという感じだつた。

係に言われるままに彼ら同様椅子に座つて待つていると、程なく名前を呼ばれたので医師の待つ部屋へ入つて行く。

少し問診があり、「アナフィラキシーのような強いアレルギーはありますか?」と聞かれたのに、そんな経験は一度も無かつたが不安だったので「アルコールアレルギーと、甲

殻類アレルギーと、日照アレルギーと、あとキウイアレルギーがあります」と病院で実際にアレルギー検証をしたわけではないが取り入れると体調を崩すものを並べ立てる  
と「一杯アレルギーがあるんですね」と苦笑された。

が、多少おかしくなつてもアナフィラキシーのように命に係わるような激しい反応にならない限りは接種は問題無いそうで、そのまま受ける。

看護師に「右か左かどちらでも構いませんが、利き手じゃない方が良いですよ」と言われたので左で受ける事にする。

医師に前もつて「アルコール無しで」と言われているので生理食塩水か何かを用意された。

取り出した注射器の針が、思った以上に長かつたので少々ビビる。

「長いんですね」と言うと「見ない方が良いですよ」と言われたが、どうせなら最後まで見てやろうと自分に刺さる所をガン見していた。

しかし血管注射より深く刺すのに痛くない。

今刺さったのかな?と思つている内にもう終わつてしまつた。

出ると「注射でアレルギーになつた事はありませんか?」と聞かれたので「ないです」と応える。

すると「十五分ですね」とタイマーを渡された。

これで強いアレルギー反応のある人は待機時間が三十分になるのだと。テレビが置いてあつて丁度オリンピック中継をしていたため、見たりボーッとしたりしていた。

その間にも先に終わらせた人がタイマーコールに従つて、それを返しつつ次々に帰つて行く。

私も鳴つたので返しに行く。「何も無かつたですか?」と聞かれて「ありません」と答えたが、うつたヶ所は若干違和感があった。

帰る時にはその程度だつたが、帰宅して何時間かすると左腕全体が痺れたような感覚になり、じんじんするようになつた。

だが麻痺するような事はなかつたため、そのまま問題無く使えた。若干力が入り辛いかな? という程度。

こうなるから「利き手じゃない方が良い」と言われたのだと納得する。

翌日は上腕だけが筋肉痛のような状態になつた。

先に受けた友人の話では、一回目でも熱が出て四日程寝込んだとの事。

だが当日もその日も熱が出るなど身体全体が不調になる事は無かつた。そのまま体調を崩す事無く二回目の日になる。

二回目は二週間後の同じ時間帯なので、また同じように病院へ行く。

医師に「変わった事は無かつたですか?」と聞かれたので、「当日腕が痺れて翌日筋肉痛になつた以外は問題無かつたです」と答える。

看護師に「左を向いて腕をだらんとしてリラックスして下さい」と言われ、その通りにしたつもりでいるのに「力が入つてますね」と言わされたので、「おかしいなあ?」とやり直す。

同じようにガン見しながら抜けたら、一回目よりも痛いような気がした。

待機時間も一回目より違和感が強い気がした。

帰宅後は上腕だけ熱を持つたような、痛痒いような表現し難い状態になつた。

翌日もうつたヶ所だけだるいような、痛痒いような感じ。

だが熱が出たりという事は無く、そのまま今日を迎える。

二回目は熱が出るだろうと思っていたので、なんだか拍子抜けた。

# 間抜けなヒキガエル

山と田んぼに囲まれた、他から少し離れた場所に有るうちの家は、それだけ自然という名の野生動物が他より多くやって来る。

虫や蛙が家中に入つて来る事はもはや日常茶飯事で、そんな中で大きさでビックリするのは「ヒキガエル（多分二ホンヒキガエルだと思われる）」である。

（「ガマガエル」ともいうが、図鑑には「ヒキガエル」の名で載つてるのでこちらが正式名称のはず）

「ウシガエル」の方が大きいしあうなのだが、この辺りには「彼ら」の生息地は無いようなので、今の所一番大きな蛙といえば「ガマ」とも呼ばれるこの蛙だという事になる。家の近くに住んでいるようで、まるで門番のようにでつかい（といつても十五センチぐらい）奴がたまに玄関先に座つていてビビる事がある。

だが生き物全般が大好きな私はいきなり出くわしてギョツとする以外は別段気にする事もなく、邪魔だつたら掴んでどかす程度である。

ヒキガエルの仲間は全部有毒なので掴んだら危ないと思われがちなのだが、目の後ろに「耳腺」（じせん）と呼ばれている大きな瘤があり、そこから出す毒（ガマの油。ブフォオトキシン）が強い（目に入ると失明するし、謝つて口に入ると最悪死ぬ）のであって、その部分を強くつまんだり押さえ付けたりしない限りは毒は出さないため、体を軽く掴んだり手に乗せたりする程度では何ら問題は無い。

自身もそこから出るものが猛毒である事が分かつてゐるらしく、その付近を触ると擦り付けるようにその方向に頭を傾けて来る。

恐らく警告のつもりなのだろうが、蛙が平気な私にとつては逆に懐いているかのようで可愛いと思つてしまふ。

あまりにいじると体中にあるイボからも毒のある粘液を出すので、それは気を付ける必要があるが。

（こちらは触つた後手を洗えば荒れたりしない）

ちなみに脇の下を掴むと体をヒクヒクさせながら「クツクツクツクツ」と鳴くのは雄だけである。

これは「リリースコール」と呼ばれているもので、繁殖期に雌を抱く（抱接）際、間違えて雄を抱かないようにしてゐるらしい。

雌はヒクヒクさせたとしても鳴かないでの、雄雌の区別をこれで付ける事が出来る。

さてある日、家の外で父が呼ぶので何事かと思つたら、大きなヒキガエルが雨樋の元の、排水管に雨水を流す場所（昔の家なので瓦と同じ焼物）と縦樋の隙間に頭を突っ込み、逆さになつて腰から下を出した状態になつていた。

軽く曲げた両脚が伸びたままになつており、ピクリとも動かないが、息はしている。よく家の前で見掛ける奴で、助けてやろうとしたのだが、上半身が丁度その場所にピツタリはまつてしまつてしまつており、少し引つ張つたぐらいでは出せなかつた。

おまけにヒキガエルは興奮すると体を膨らませる性質があるため、ますます抜けなくなつた。

いくら引つ張つても抜けないので見ていた父に「もう壊すか」とたまたま持つっていた鍬を見せられたが、焼物なので一度割つたら元に戻せないし、どうにか壊さずに出してやれないかと奮闘した。

もう最悪殺しても良いやという勢いで両手で腰を強く掴み、無理矢理引つ張るとどうにか引き摺り出す事に成功。

死んでいないのを確認してやれやれと胸を撫で下ろし、だいたい潜んでいる物置小屋の床下の隙間に置いてやつた。

生まれてこの方こんな間抜けな野生動物は見た事が無い。父も初めて見たとの事で、呆れていた。

一応発泡スチロールを加工して隙間を塞いだが、野生でもこんなドジな奴がいるもんなんだなと思った出来事だつた。

## 「もう良いよ」と鳴く蝉

秋に移り変わる今頃の時期は、昼から夕方にかけては蝉の合唱、夜には虫の合唱とけつこう賑やかである。

(ちなみに梅雨の時期の夜は蛙の合唱で賑やかだった)

今頃鳴いている蝉は「ツクツクホウシ」で、この蝉が一番遅く鳴き始めるため「秋の蝉」と言われているくらい。

ところで鳥たちが歌う「恋の歌（ウグイスならホーホケキヨなど）」と同じように、虫の「恋の歌」にもそれぞれが決まった歌詞（鳴き方）が存在しているのをご存知だろうか。

それは蝉にも言える事で、その歌詞が分かりやすいのは「ミンミンゼミ」と「ツクツクホウシ」あたり。

ミンミンゼミの場合は『ミーンミンミン』から歌い始めて最後に『ミーン←』と疲れたかのように語尾を下げる。

夏の暑い盛りにこの歌を聞くと、私は最後の語尾で余計に気持ちがだるくなる。

たまに途中の『ミンミン』の数が増える事があるが、必ずこのフレーズを繰り返すので、どうもこういう「恋の歌」の歌詞になつていてるらしい。

ツクツクホウシの場合は『ホーシツクツクホーシ』から歌い始めて途中で『ツクツクヒイヨー』と聞こえる高めの歌詞が入り、最後に『ジイー』と伸ばして終わる。

こちらも途中の『ツクツクホーシ』の数が増える事がある（正確にはその中のツクツクの部分。ツクツクツクホーシになる場合がある）が、このフレーズを繰り返して歌う。そんな話を家族としていたら、父がこう言つた。

「わしには『もう良いよ、もう良いよ』と鳴いてるように聞こえる」

どうやら父の耳には『ツクツクヒイヨー』の部分が『もう良いよ』と聞こえるらしい。つまり一フレーズに二回か三回繰り返すその部分で、父は毎回『もう良いよ』と言わ  
れ続けていた訳だ。

ならツクツクホーシが「恋の歌」を歌つている間中、毎年何度『もう良いよ』と言わ  
れ続けるのだろう。

そう思つたらなんだか面白かつた。

蝉といえば、日本人の耳にはうるさくとも季節を感じて風流に聞こえる鳴き声が、外

国人（白人?）の耳には雑音にしか聞こえない、という事を知っているだろうか。

ある有名な日本人の監督が時代劇の映画を撮つてそれを外国に見せに行つた時、情感を煽るようなとても大切なシーンで蝉の鳴き声が効果的に使われていたのに、「このノイズはどうにかならんのか」というような事を言われたのだという。

監督は困惑しつつも「日本では蝉の声は情緒を煽る効果がある」というように説明して、納得してもらつたのだとか。

個人的で勝手な想像だが、日本には「十七年蝉」のような、十年以上も幼虫のままで土の中にいて、周期が来たら何兆匹もが一斉に羽化して鳴くような蝉がいらないのもあるのではと考えている。

そんな大規模なものが一ヶ所で鳴くんだから、それはそれは喧しいだろうと思う。もうともじやないが風流などと言つてはいられないだろう。それこそ鼓膜が破れかねない程不快な声のはずである。

日本人（特に女性）は奥ゆかしいとよく言われるが、そう思うと野生動物も、環境の違いとはいえ外国のものに比べたらもしかしたら奥ゆかしいのかもしない。

# 金色の蛇

日本には金色の蛇がいる、と言えば「何を馬鹿な」と思うだろうか。  
しかし冗談抜きでいるのだ。漢字で「金蛇」と書く動物が。

ここで「なんだ、アイツか」と思った方は余程の動物好き、しかも取り分け爬虫類  
に詳しい人に違いない。

漢字で金蛇と書く動物は、片仮名では「カナヘビ」と書く。

ここまで書いても爬虫類に詳しくない人は「蛇の仲間だ」と思うだろう。  
カナヘビは蜥蜴の仲間である。

何故トカゲなのにヘビというややこしい名前が付いているのか？

それは恐らく姿によるものだと思われる。

カナヘビは別にヘビのように手足が無い訳では無く、どう見てもトカゲにしか見えないのだが、全体が細長く、尾が非常に長いのだ。

これは私の憶測に過ぎないのだが、たまたま手足が草の中に隠れでもして見えない時

に見付けた人が蛇だと勘違いしたのではないかと思う。

まあもし蛇と見間違えたのだとしても生れて間もない子蛇ぐらいにしか見えないのだが、体をくねらせて歩く様子などを見たら、そして素早く走つて手足が見えないような状態だつたら蛇に間違えられても仕方がないのかかもしれない。

色は背面が褐色または灰褐色で、腹面が黄色味がかつた白。

これのどこが金なのだと思うのだが、もしかしたら日本では茶色または黄色味がかつた茶色の事を金と表現するのかも知れない。

それか、「金」は「きん」ではなく「かね（金属）」という意味もあるので、「金属質な蛇」という意味でこの名が付けられたのかも知れない。

でも金属質な、つまりメタリックな光沢があるのはむしろ「ニホントカゲ」の方である。

私は高校の頃、このカナヘビ（ニホンカナヘビ）を捕まえて飼つていた事がある。

餌は生きた虫。

というのも（蛙や蛇もそうなのだが）爬虫類、両生類の類いは「動いているもの」しか見えないためである。

しかしその当時はペット用のトカゲというものは売つていず、従つてそれ用の生餌などは無かつたし、そもそもが初めから自然の餌で飼うつもりでいたのでその辺の虫を捕

まえては与えていた。

受精した雌だつたようで、何日かしたら白くて小さな、楕円形の卵を産んだ。

調べたら湿つたコケなどで保護すれば良いという事が分かつたので、コケが渴かないように、かつ濡れ過ぎないように調節しながら孵化を待つと、やがて小さなトカゲたちが出て来てとても可愛らしかつた。

そのままカナヘビのミニチュア版だつたが、親よりも黒っぽい色だつたので、成長するにつれて色が薄くなつていくのだと分かつた。

親には「カナちゃん」などと名前を付けて可愛がつていたのだが、水槽を飼育箱代わりにしていたのが悪かつたのか、出られないだろうと高を括つてろくに蓋をしないで飼つていたら、どうも隙間から抜け出たようで、親子共々いなくなつてしまつた。

都会の只中ならば心配するが、ここは山の中なので出て行つてもどうせ自然に帰るだけだし、元々日本にいる在来種なので他のカナヘビとの混血をつくつて遺伝子を変える心配をする事もない。

とても残念な出来事ではあつたのだが、自然に帰れて良かつたと考え直した思い出だつた。

余談というか一応「カナヘビ」について調べた中で、名前の由来が「可愛い（愛らし

い）蛇」という意味で「愛蛇」になつた、と書いてあつたサイトがあつた。  
確かに顔が可愛らしいのでこういう意味でカナヘビになつた、という説もあるのかも  
しれないなと思った。

# 家を守るもの、井戸を守るもの

うちの家は、というより山に近い田舎の家なら大抵はそうだと思うのだが、窓ガラスにヤモリが張り付いている事がある。

(といつても蛙もよく張り付いているのでヤモリに限つた事ではないのだが)

夜にも来るので恐らく電灯に誘われて窓で遮断される虫を目当てにしているものと思われる。

(むしろ昼よりも夜に見掛ける事が多いので、その可能性が高い)

つまり蛙もヤモリも外側に張り付いており、部屋から見ると腹側だけしか見えない、という状態になる。

(外に出れば当たり前だが背中が見えるので、どんな奴が来ているかを見る事が出来る)

このヤモリ、いつも同じ場所に張り付いている事が多くのと、可愛いので飼つてる訳でもないのに名前を付けている、と新聞の一般投稿欄に載っていた程田舎では馴染みのある奴である。

このヤモリについて話すと、友人でも「ヤモリとイモリの区別が付かない」と言つて来る。

確かに名前がよく似ているし、姿も同じトカゲ型なので生き物に興味の無い人から見たら区別が付かないのだろう。

だが、漢字で書くとその意味が一目瞭然になるのだ。

ヤモリの漢字は「家守」。つまり「家を守るもの」という意味である。

昔から家の付近に生息し、指裏の構造上壁に張り付いている事が多いため、害虫を食べて家を守ってくれるという事でこういう名前になつたのだ。

(ちなみに先が丸くなっている指裏は吸盤ではなく、マジックテープの仕組みと同じとの事。その構造はとても細かく、顕微鏡でしか見えない程の、鱗が変化したと思われる毛のようなものがびっしり生えているのだとか)

対してイモリの漢字は「井守」。つまり「井戸を守るもの」という意味である。

指は細く、裏もヤモリのように張り付くような構造になつていないので、井戸（水場）にいて井戸を守っているかのように見えるためにこういう名前になつた。

名前がよく似ていて間違えられやすい両者だが、決定的な違いがある。

どちらも同じようなトカゲ型だがヤモリは爬虫類でイモリは両生類（サンショウウオ）である。つまり種類が全く違う。

遺伝子も違うので両者を掛け合わせても交尾出来ないし子供も出来ない。

いくら似ているからといって、水場でしか生きられないイモリをヤモリの傍に置いておくような事をしたら死んでしまうし、逆にヤモリを水場に入れてしまっても水中で息が出来ないのでこれも死んでしまう。

(泳ぐ事は出来るが水中では生きられない)

あとヤモリは全体的に白っぽいがイモリは黒いので体色は真逆である。  
(ただし「アカハライモリ」というくらい腹側は鮮やかな赤なので、ひっくり返すとそのギヤップにビビる事がある)

「ヤ」モリ、「イ」モリとただの一字違いでも、これだけの差があるのだ。

だがどちらも田舎では昔から馴染みのある生き物で、日本の風景というのか「日本らしい」景色の演出に役立っている。

つまり農家の、田んぼのあるような所の家には必ずと言つて良い程ヤモリが張り付いており、もし井戸のある家庭では井戸に、そうでなくとも田に水を引く用水路や田の中にはイモリが住み付いているものである。

しかし近年稻に使う農薬の影響か、イモリのいない田もあるのが生き物好きな私としては心苦しい。

そういう田は蛙もいなくなるので可愛らしい「彼ら」が見られないのはとても残念で

ある。

幸いにもうちの近くは毎年喧しい程蛙の大合唱が聞かれるし、家にもいつも来るので私としては幸せである。

## 虚しき猛アピール、その後

今回は第四話「虚しき猛アピール」に出て来た雉猫「縞」のその後の話である。というのも春に来てからずっと、未だに通い詰めているからである。

それどころか毎日来るようになり、しかも倉庫などでよく見掛けるようになったため、どうも飼い猫の雄が雌の匂いに誘われて通つて来ている、という事ではなく、完全な野良で住む所が無いから倉庫など雨露をしのげる所で暮している、という感じなのだ。

で、始めは人目を忍んで餌を食べに来、逃げ腰を構えて誰かが来ようものなら即逃げ出す、という様子だったのが、誰かがいても（多少ビクついてはいるものの）堂々と食べるようになつた。

しかも甘えた声で鳴くようになり、外にいる時限定（家の中では不安らしい）だが抱っこも慣れてゴロゴロ喉を鳴らすようになつた。

うちの雌は、というよりは雄雌に限らずうちにいる代々の猫は、野良だった自分が住

む場所も無く迷っている頃にうちに来て安寧の棲み処を得たという経歴があるからか、「他所の猫」に寛容な奴が多い。

もちろん始めは威嚇し、逃げ回るのを追い掛けで攻撃したりして追い出そうとするのだが、それでも通つて来る奴には（恐らく諦めもあるのだろうが）自分の餌を食べているのを見ても知らぬふりをするようになる。

むしろ『困っているならうちで食べれば良い』と連れて来ている風がある。

だが攻撃して追い出され、縄張り争いに負けてそのまま來なくなる奴もいて、「虚しき猛アピール」で登場したシルバータビー（白縞）はあの時依頼一切来なくなってしまった。

その代わりのように、今度は八割れ模様の顔に背中は黒いが四肢や腹側は全部白いという白黒模様の猫が来るようになつた。

通称「白黒」と呼んでいるこいつはしかし日本猫の「黒ぶち」と違つて黒い部分が完全な黒ではなく、よく見ると淡い縞模様が入つている。

なので洋猫の血が混ざっているのだろうと思う。

こいつも「縞」同様やや小振りである。

しかし来た時は普通の雄より小振りで、成長途中かもしくは栄養不足で小さいままなのかと思っていた「縞」は、今では普通の雄の大きさになり、顔も鰐が張つて四角く見

えるようになつて、大人の雄らしい貫禄が出た。

そういうのを見ると、猫の雄は大人になりきる前に発情し、出歩くようになるのだろう。

そうやつて縄張りを探し、追いつ迫われつして喧嘩に明け暮れながら自分の居場所を得るのに違ひない。

飼い猫の雄ならばそのまま自分の家に帰るのだろうが、野良ではこういう流れになるので、「猫」というものはこういう生態を持つてているのだと思う。

さて「白黒」は、今の所うちの雌だけでなく「縞」にも迫られるとても弱い立場にある。

しかし「白縞」よりも根性があるようで、それでも通つて来る。

食べ物に困らないのでそれだけうちが魅力的なのだろうが、特に「縞」と鉢合わせると脅され、恐怖のあまりにクソ小便を垂れ流しながら逃げるのだ。

大抵餌場（野良用と家猫用の二ヶ所ある）で鉢合わせるので屋内だがコンクリートの床の方（野良用）にそれが振り撒かれる事になり、やられると始末に辟易する。

でも、そんな怖い思いをしても奴はやつて来る。

しかも家猫用の餌にも目を付け、こそそつと家の中に入つて来るようになつた。  
(ただし見付かると即行で逃げる)

る。「彼」（恐らく雄）も、「縞」同様「うちの子（もしくは外猫）」になりそうな予感であ

# 「ピースサイン」の元は挑発だつた？

先日、ファンタジー世界などに登場する武器についての本（昔買つた古い物）を読み返していると、その中に興味深い記述があつた。

その本曰く、『ピースサインとして知られている人差し指と中指を立てて人に見せるハンドサインは元々は平和の象徴ではない』という事なのである。

このハンドサインの元になつた仕草は、「百年戦争」と呼ばれているフランス王とイングランド（イギリス）王との王位継承権及び領土争いが長期化した鬭い（俗に1337年～1453年までと言われている）がきつかけだつたらしい。

イングランドの兵は「ロングボウ」という弓を操る術が非常に長けていた。

それで戦果を上げてはイングランドを有利に導いていたので、捕虜として捕まつた場合、二度と弓を引けないように人差し指と中指を斬り落とす事があつたという。

そこでイングランドの弓兵は、敵にわざと人差し指と中指を立てて見せびらかし、二本の指が健在である事を見せ付けると共に「斬れるものなら斬つてみろ」と挑発してい

たんだとか。

それがいつしか二本の指が健在である||捕虜にならない（戦争が無い）平和な証拠、と  
いうように変わり、この指二本を見せる事が平和の象徴になつていつたらしい。

他にも英語圏では「勝利（victory）」のVの形と同じなので、戦争に勝利した  
||平和になつたというように変わつていったという説もある。

しかしこのハンドサインで挑発するやり方は、実は日本では通用しない。  
何故かと言うと日本では弓を引くやり方が違うからである。

日本ではアーチエリーやで見られるような、矢の尻に刻まれた溝に弓の弦を入れて  
つがえると共に、人差し指と中指で矢を挟んだ状態でそのまま二本の指を曲げる事で弦  
を引っ掛け引く、というやり方はしない。

親指と人差し指で矢を挟み、矢の尻に刻まれた溝に入れた溝に弓の弦を入れて  
に矢をつまんで持つてそのまま引くからである。

つまり日本の場合は指で弦を触らないのだ。

これは現代でも「弓道」で継承されているし、それ用の「籠手」も作られている。

ちなみに高校時代に弓道を齧つた（弓道部に入つたというよりはそこで部員に色々教  
えてもらつた）事がある私は、その籠手が弦を固定する（引きやすくする）ためではなく、矢を固定する（挟みやすくする）ためにあるという事を知っている。

矢を挟んでいる親指と人差し指だけの力で弓を引くため、それを補うための籠手なのだ。

という事は、もし日本で捕虜になつた者の指を斬り落とすという見せしめがあつた場合、「人差し指と中指」ではなく「親指と人差し指」が斬り落とされるという事になる。なのでもしピースサインの発症が日本であるならば、親指と人差し指を立てるハンドサインになつたかも知れないのだ。

そう考へると、特に写真を撮る時などに誰もが行うこのサインが、もしかしたら違つた形になつていたと思うとなんだか面白い。

余談だが、この弓を引く動作の和洋の違いを知らない監督がいると時代劇のドラマや映画で興醒めする事がある。

弓を引くシーンがあつた場合、日本の時代劇なのに人差し指と中指で弦を引っ掛けて引いている事があるからだ。

それが感動的な場面や臨場感を煽るような場面でアップになつてたりしようものなら、もう失笑ものである。

# 髪の毛の不思議

興味のある人は実際にやつてみて欲しいのだが、自然に抜けたものでも抜いたものでも良いので髪の毛を一本手に取つてみて欲しい。

それを爪で挟み、根元から先まで一気にしごくようになると、途中で切れるなど痛んでいられない限りは、上手く行けばまるでバネであるかのようにくるくると巻かれないだろうか。

綺麗に巻かなくとも縮れたようになると思う。

ただし私は髪質が直毛で、くせ毛の人の事は分からないので、もしかしたらくせ毛ではこんなに綺麗に巻かないのかもしれないが。

もし綺麗に巻いたり縮れたりするような髪質であるならば、それを水に浮かべて欲しい。

そのまま何もせずに見ていると、ひとりでに動き出さないだろうか。

そして徐々に徐々に巻いたり縮れたりしたようなものが解け、元に戻らないだろう

か。

私はこれが生き物か形状記憶合金であるかのようで面白く、時折観察して楽しむ事がある。

水は元に戻った時に全体が浸かるような量でなくとも良く、一滴ぐらいでも一部が戻つたりする。

だがやはり、全体が浸かるぐらいの方が戻るのが早いようである。

ちなみに「水」である必要も無く、「液体」であるならば何でも良いようだ。

(やろうとは思わないが、何も無かつたら自分の唾でも戻るという事)

これは寝癖を直す時なんかに使えるテクニックである。

つまり癖の付いた髪の毛は、あれこれやるより一度濡らした方が元に戻りやすい、と  
いう事になる。

調べると内部にある「水素結合」というものに関係していくとの事。

髪の毛は全体が濡れるとその水素結合やらというものが切れてフリーの状態になり、乾くと再びそれが起きて形が決まるのだとか。

なので曲がったまま乾く(水素結合が起きる)とそのままの状態で固まるため、癖になつたら一度濡らして水素結合を切つてから希望の形に整える必要があるらしい。なるほど、これをを利用して自由なスタイリングをするという訳か。

つまり化学的に言うと、髪の内部にある水素結合の調節が上手い人程お洒落な髪型に出来る、と。

今じゃもう無くなつてしまつたのだと思うのだが、昔学校に水銀式の温度計と共に「湿度計」なるものが壁に掛かっていたのを覚えている。

それは一部が「髪の毛で出来てゐる」という事を聞いていて、よく仕組みが分からな  
いままにどうやらこの髪の毛の伸び縮みで湿度を計るらしい、という事を教わつて計つ  
たりしていた思い出がある。

という事は、あれは水素結合を利用したものだつたのかもしれない。

つまり髪の毛の内部にある水分が今どれくらいあるか、で計る装置だつたのかも。

ならば人間の髪の毛というものは、それ程正確に湿度が計れるという事だつたのだろうか。